
すべては始めから仕組まれたこと。

美夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべては始めから仕組まれたこと。

【Nコード】

N4058Z

【作者名】

美夢

【あらすじ】

マリアこと桜井あずみは都会の私立学校に通う高校二年生。明るく夢見がちなのが特徴の彼女は少し霊感が強い。

霊感についてはあまり気づくことなく、日々を送っていたが、ある日ブラックベガと名乗る男に誘拐される。

彼の目的はマリアの霊感能力。

しかし、そんなことは露にも気付かないマリアは

ブラックベガに恋をした。

出会い

6月1日、日曜日。天候は雨。

ジューンブライドが騒がれる季節に
私は恋愛運を占ってもらった。

「今月彼氏ができますよ」

セラナーデという占い師はにっこり笑ってそう断言した。

「本当ですか!？」とび跳ねたい気持ち溢れる。

やっと。やっと恋愛ができる。

「はい、今月の恋愛運はとても高く、殿方に声をかけられるでしょう。その時、恐がらず、誘いに乗ってみなさい。彼が恋のキューピットとなってくれます」

セラナーデに礼を言った後、私はにわかにスキップしていた。

嬉しかった。

高校2年生。

周りはみんな彼氏ができて楽しそうなのに、私にはてんで縁がなかった。

「アズミも作りなよ、彼氏。じゃないと学生つままないじゃん」

簡単に言われても、それが難しい。

声に出しては言わないけど、万が一振られるなんてことがあったら大恥じゃん。

「いい人がいないの」

という言葉は嘘だった。同じクラスの中西君なんて、ちょっとタイプだなと思う。

「そう？でも合コンのらないし。たまには外の世界にでなよ」

「考えとく」

そう言っただけはいつも逃げる。

友達の合コンは正直、我が家の財政的にきつい。

でも、友達とのこんなトラブルも今日で終わり。

私は今月とうとう彼氏ができるんだ。

期待を胸にいっぱい膨らませて、顔まではみだしてしまった。
正面から私を凝視する男性にも気付かなかった。

「マリア？」

その男性が視界に入ったのは、声が聞こえて正面を向いたとき。
胴体だけが視界に入り、顔は遙か上にあった。

「え？」

背の高い男性だ。

いや、私の背が低いせいもあるのだが。
こんなに見上げるのはあまりない。

「マリア。探してたよ」

「あ、いえ、人違いです。私は……」

そこで占い師の言葉を思い出した。

殿方に声をかけられる。
恐れず誘いにのる。
彼がキューピット…。

男性を凝視する形になった。
声をかけてくれた殿方は人違いをしているようだけど、指摘した方がいいのか。いけないのか。

「マリア。かわいいね。さ、家に帰ろう」

「え!?!」

いや、家って、その、それはさすがに危ないんじゃないか…

など思っている間に殿方は私を抱きしめた。
優しく包み込んでくれる温かさ。
男の人に抱きしめられるのは初めてだった。
とても気持ちよかった。

けど

「あ、あの」

勘違いはやっぱりよくない。
私は一生懸命彼を見上げて言った。

「あの、私、マリアじゃないです」

出会い2(前書き)

続きです

出会い2

はつきり言った。マリアじゃないと、うん。大丈夫。大きい男の人は少し首をかしげている。よく見たら、外人さんみたい。瞳が青い。

「私は、あずみといいます。マリアじゃありません」
「どうだ！とのごとく私は胸をはってみせる。」

男の人はしゃがんで、私の顔をなめるように見る。

「だからマリアじゃ…」
「ちよつと来て」

急に手をひっぱってビルの裏に連れて行かれる。

「あの！もう帰るので」
「どこに?」

男の人は突然立ち止まると一枚の写真を見せた。

「これ、マリアだよな?」

写真をみる。

「え…」

そこには赤いドレスを着た女の子が写っている。
背景は暗くてよく見えないが、女の子の顔は確かに、私に酷似して

いた。

「よく似てるけど…この子の方が可愛いです」
私はこんな赤いドレスを来た覚えはない。
それに、確かに似ているかもしれないけど、私はこんなに写真うつりが良くないのだ。

「一緒だよ。僕のこと覚えてない？」

「知りません」

「そうか、人違いか…悪かった」

男の人があまりに気を沈めるものだから、悪いことをした気になる。

「あの、気にすることないですよ。人違いなら仕方ないし」
私は一生懸命とりつくろう。

「この世で似た顔の人は3人いるっていうし」
なんとか男の人が元気の出るように、一生懸命笑った。

すると、男の人は憂いを帯びた頬笑みを返してくれた。

「ごめんね。少し、話を聞いてくれないかな。ここじゃなんだから、あの喫茶店で」

そう言って指差した喫茶店は、私の大好きな喫茶店だった。

「はい。いいですよ」

私はミルクレープを思い浮かべながら、これも人助けと喝を入れ、セレナーデの言っていた恋のキューピットも忘れず、頭の中は忙しかった。

「僕はブラックベガ。マリアとはある約束をしていた男なんだ」

私はミルクレープと紅茶、男の人はチョコレートケーキとコーヒーを注文した。

どちらもケーキセット。今の時間はケーキセットがお得だと私が力説した。

「ブラックベガさん？外人さんですか？」

男の人の瞳を見る。さっきは鮮やかな青に見えた瞳が、今は黒い。

「本当に覚えてないんだ」

男の人はぼつりと言ってから視線を落とす。

私は質問しながらミルクレープを食べる。

甘いクリームと柔らかい生地の間。口の中に優しさの味が広がる。

「ブラックベガも、マリアも、本名じゃないんだ。だからマリアの本名は知らない」

そう言うってから私の方に視線を戻す。

「ちょっと話長くなるけど、大丈夫？」

私はこくりと頷いた。

僕たちはある組織の一員なんだ。

まあ、新興宗教とおもってもらっても構わないよ。神様はいないけど。

しいて言うなら、マリアが神様役だ。

僕とマリアが出会ったのは3年前。

僕たちの組織の何人かはある屋敷に住んでいる。僕もマリアも屋敷に住んでいたんだ。

マリアは外には出られない。身体が弱いし、大切な存在だからね。

写真の、この部屋にずっといる。写真はこれしかない。記念の写真なんだ。

昨日の夜、マリアがいなくなった。

組織の人間みんなで探しにでかけたが、見つからない。

警察には届けを出せない。

マリアの本名も知らなければ、家も知らないからね。

…でも僕は知っている。

マリアには家も家族もない。

本名も、昔に忘れてしまったんだ。

「だから君が私はあずみだって言った時、マリアが本名を思いだしたのかと思った」

ミルクレープを食べ終え紅茶を飲もうとした時にいきなり話が終わった。

ブラックベガさんもコーヒーを飲んでいる。

少しの沈黙が流れる。

「どうやら、本当に違つみたいだ。それなら、僕が話せるのはここまで。お茶に付き合ってくれてありがとう」

チョコレートケーキには一切手をつけずに、伝票を持って立った。

「チョコレートケーキ、食べてていいよ。紅茶のおかわりも頼んでおくよ」

そう言ってブラックベガさんは店員に何かを言って店を出て行った。

何なんだろう。

新興宗教？

屋敷には組織の人が住んでいる。

インターネットで調べられるかな。

好奇心がわき水のように、少しずつ控えめに、だけど止まらなかつた。

高校2年の6月1日。

それから1週間後に彼氏ができた。

セラナーデという名前の占い師に尊敬を抱いた。

付き合い

中西君から告白された時は、驚いた。

それは、今までしゃべったこともない、好意を持っていた人からの急な告白であったからではない。

それもあるけど、それ以上に、

「マリアに似ているから」

という言葉が、うずいていた好奇心をさらに熱くさせた。

「マリアを知っているの？」

ブラックベガと名乗った男の人とはあれから会っていない。

セレナーデという占い師もいなくなって、あの日のできごとは塵気楼のようになんの痕跡もなくなっていた。

中西君は、もちろん、という意味を含ませた笑みを見せる。

「君がブラックベガに会ったこともしっているよ」

それから中西君との交際がスタートして、ブラックベガの言っていた組織について、少しずつ探っていくこと思っていた。

「そんな回りくどいことをせず、僕らの組織に入ったらいいじゃない」

中西君は、私の思惑など簡単に見過ごして、誘う。

「そんなに簡単に入れるの？というか、抜けられるのかな…」

新興宗教。

昔ニュースに取り上げられた宗教を思い出す。

まるで何かに取りつかれたかのように、青ざめた笑みの人たち。

中西君は、ふっと笑っただけだった。

そこに、青ざめた笑みは感じなかったけれど、抜けられない、という雰囲気は肌にかすった。

「残念ながら、僕は下っ端だから、聞きたいことがあったらブラックベガに直接聞いて」

そういつて住所の書かれた紙を渡される。

聞いたこともない地名の下に携帯の電話番号。

「そんなに簡単に、住所とか電話番号とか渡していいの？」

受け取ったメモをしっかりと握りつつ、聞く。

「別に、心配だったら親に言うなり友達に言うなりしたら？」

疑り深い私に嫌気がさしたのか、中西君は背を向けて歩いて行った。

中西君と付き合って、いくつかわかったことがある。
彼の笑顔はいつも遠いところを見ている。
そして、彼は絶対に、私に触れない。

ブラックベガさんは会うなり早々私を抱きしめた。
しいて言うならマリアが神様。

私の気持ちは恋よりも、新興宗教やブラックベガさん、そしてマリアについての方が大きかった。

もらった紙をぎゅっと握る。
ブラックベガさんに、もう一度会いたい。
でもなんて言って会えばいいのだろう。

組織に入る。
それは危ないだろう。

そうだ、危ないんだ。
きつとこれば危ないんだ。
でも、どうして中西くんは、普通なんだろう。
組織に入っているけれど、普通に学校に通っている。

組織に入ったら屋敷から抜け出せないのでは？

頭の中は忙しかった。

ただ、組織に入るとか、そういうことは何度もうなずいては否定してを繰り返していたけれど、
変わらない思っただけは、確かにあった。

ブラックベガさんにもう一度会いたい。

「これは浮気かしら」
付き合っつて早々、他の男性に会いたいと思うなんて。
言葉とため息をもらして、中西君の後を追った。

そもそも私は、どうして中西君のことをちょっといいな、なんて思っていたのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058z/>

すべては始めから仕組まれたこと。

2012年1月12日01時04分発行